石井式漢字教育革命

第一章　幼児の能力を見直そう

三歳の幼児が、高等数学をすらすら

七、八年前、テレビで、三歳の幼児が、大学生でもなかなか解くことのできない高等数学の問題を、すらすらと解いて見せ、スタジオでその問題を出した数学の大学教授を驚かしたことがあります。その幼児の名前を、金雄鎔と言います。韓国の子供です。

雄鎔君の両親は、二人とも大学教授ですから、良い素質を受けついでいたことでしょう。しかし、素質が良いだけで、高等数学が解けるようになるはずがありません。それにはそれだけの教育が、三歳までの間に行われていたからです。

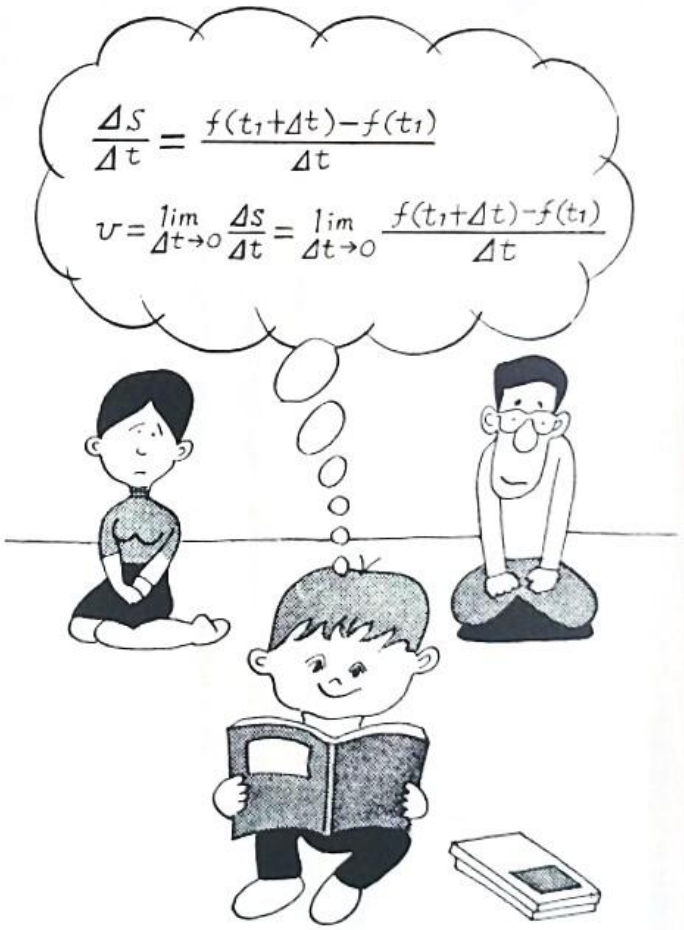
雄鎔君は、生後わずかに八か月の時から、毎日、漢字を教えられたのです。初めは一日に一字、それが二字、三字となり、やがて六十枚の漢字カードを、わずかに二日で覚えるほどになり、三歳になった時には、どんな本でもばりばりと読み、それが理解できるよう

になっていたのです。

雄鎔君は、その後、七歳でアメリカの大学を受験して合格し、今ではアメリカで大学生活を送っています。何という驚くべき天才もいるものかなと、だれもがきっとそう思い、これほどの天才は、広い世界にも、何百年に一人出るか出ないほどの大天才ではないだろうか、と考えるに違いありません。

しかし、私はそうは考えていません。雄鎔君は確かに素質が優れていることには違いない、と思います。でも、雄鎔君が乳幼児期に受けたような教育（基本的には〝漢字教育〟）を受ければ、どんな幼児でも、それに近い能力を身に付けることができます。また、どんな幼児でも、そのような教育を受け入れる能力を備えているものです。……私は、そのように確信しています。

私がそう確信しているのには、勿論、それだけの理由があるのです。その理由を、順を



三歳の幼児が高等数学の数式もスラスラ解いて……

追ってお話したいと思います。

漢字は零歳から覚えられる

生後八か月という赤ちゃんは、アーアーとか、ウーウーとか、まだ言葉にならない音声を発しているのが普通です。そんな時期に、漢字をどんな方法で教えたところで、それを受け入れて覚えるはずがない。そんな時期に、毎日漢字を覚えていったという雄鎔君は、超人的な存在であって、一般にはとても考えられないことだ。……あなたはきっとそう思われるに違いありません。

ところで、生後八か月という時期は、母親の言葉を聞くと、それを模倣して言ってみようと努力し始める時期なのです。母親の言った通りに言ってみようとして言い、その言ったものを自分の耳で聞いて確かめ、自分の発音を母親の発音に近づける努力を始める時期です。

こうして幼児は言葉を覚えていくのですが、それからわずか三、四年の間に、およそ二千の言葉を覚え、それを文法的にも正しく使えるほど、母国語を身に付けることに成功するのです。この〝言葉の学習〟とは、だれもが当たり前のこととして経験しており成功しているので、やさしいことだと思っていますが、実は大変な仕事なのです。それに比べたら〝漢字の学習〟など実にやさしいことなのです。

雄鎔君が来日して、テレビに出演して人々を驚かしたそのころ、「一歳半の坊やが三百字の漢字を読む」ということでマスコミの話題になった田中庸介君が、漢字に初めて関心を示したのは、やはり生後八か月のころでした。

また、沖縄で石井方式漢字教育の普及に努めてくれています又吉信一氏が、長男の孝旨

君に漢字を教え始めたのが、やはり生後八か月の時でした。孝旨君は、それから半年の間に、二百字の漢字を覚えました。発音はまだ不十分でしたが、漢字を読み分けていることだけは、私がこの耳で確認いたしました。

零歳児に、漢字が覚えられるのは

雄鎔君には会ったことがありませんが、庸介君や孝旨君には会っていますし、その御両親とも交際がありますから、よく知っているつもりです。確かに、庸介君も孝旨君も、雄鎔君と同じように、零歳のうちから漢字を覚えました。けれども、決して超人ではなく、当たり前の幼児です。雄鎔君も恐らく同じだろうと思います。

生後八か月という時期は、すでに述べましたように、母親が語りかける言葉を受け取って、その通りに自分でも言ってみようとし始める時期です。つまり、〝かたこと〟を言い始める時期です。

耳から入ってくる言葉を大脳に納め、その通りに口から出すことは、幼児の受納能力や模倣能力が高いから出来るのであって、決してなまやさしいことではないのです。そのことは、私たちが外国語を学習する場合に、いやというほど痛感させられていることです。言葉は、いくつもの異なった音声から成り立っていて、それは一定の順序で、一定の時間的な間隔をもって、次々に見せられ、発せられるはしから消えてしまいます。だから、その微妙な違いのある音声を即座に識別しながら、次々とその全体を正しく受け取り、それを脳に記録するということは、よく考えてみれば、大変な仕事だということがわかると思います。

それに反し、漢字は、初めから一つのまとまりのある図形をしていて、しかも、記憶で

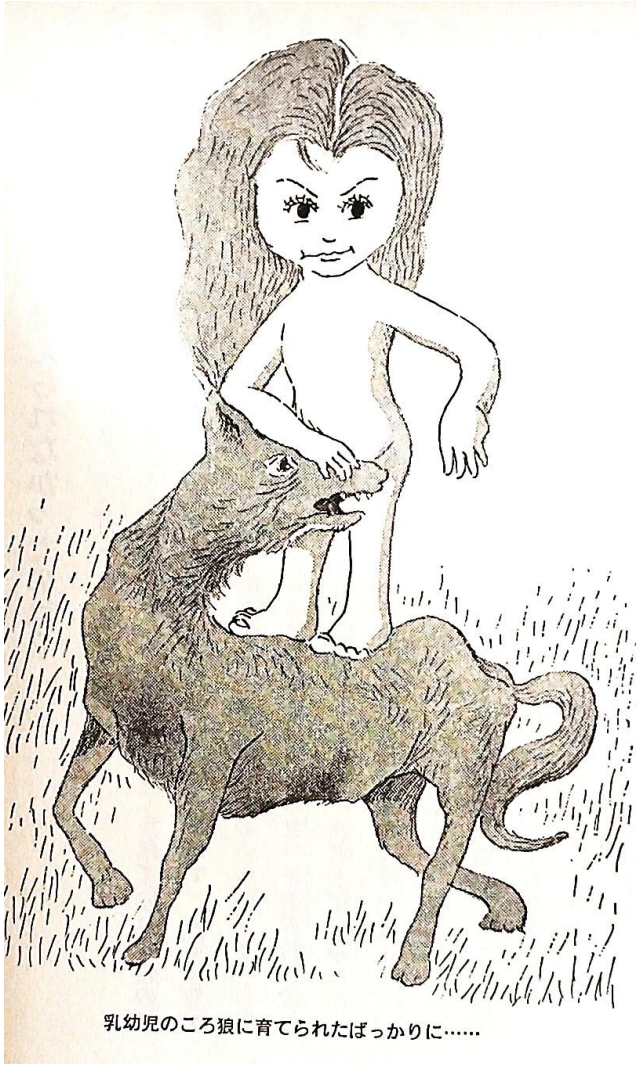
きるまで消えずに待っていてくれるのですから、覚えられないわけがないのです。すでに親の顔を覚え、人見知りするだけの識別力を持つ赤ちゃんの能力を以てすれば、漢字を識別することなど実に容易なことなのです。

今まで、零歳児に漢字が覚えられるわけがない、という先入観だけで、だれも漢字を教えなかったから、赤ちゃんは漢字を覚えなかっただけです。

狼少女が言葉を覚えられなかったのは？

一九二〇年、インドのカルカッタに近い、ある村の洞穴から、狼に育てられていた二人の少女が、シング牧師の手で救い出され、それぞれ、アマラ、カマラと名付けられて、大切に育てられました。

親の顔がわかる赤ちゃんには，漢字を覚える能力がある



乳幼児のころ狼に育てられたばっかりに……

アマラは間もなく死にましたが、カマラは、その後九年間生きていました。その詳細が、牧師の日記に書き残されています。これは、後に、有名な心理学者、アーノルド・ゲゼルによって学術的に研究され、その事実とそれに関する考察が学界に発表されました。それによって、狼少女のことが世に広く知られるようになりました。

ゲゼルの推定によりますと、九年間に四十五の言葉しか覚えられなかったのは、カマラの素質が悪かったためではなくて、人間の大脳が最も成育する乳幼児期に狼に育てられたために、狼的な能力だけが育ち、人間的な能力が一つも育たなかったためだ、ということです。

初めの二年間は、人になつかず、食べ物をもらっても、部屋の隅へ運んで行って食べていました。それも手を使わず、直接口で、食べました。昼間は部屋の隅にうずくまって眠ることが多く、夜になって四つ足で這い回りました。その時の目は輝き、遠吠えをしたと

いうことです。三年後に、やっと立って歩けるようになりましたが、それでも、急ぐ時には、やはり四つん這いになって駆け、それは死ぬまで改まらなかった、ということです。

このように、乳幼児期に身につけたことは、良かれ悪しかれ、改めにくいものなのです。まさに〝三つ子の魂百まで〟のことわざ通りです。従って、人間としての基本的な諸能力は、すべて乳幼児期に育てることに努めなければなりません。この時期を外したら、一生取り返しはつきません。乳幼児期の教育ほど大切なものは、他に断じてありません。

乳幼児に覚えられる漢字が小学生にはなぜ難しいのか

言葉は発せられるや否や消えてしまうので受け取りにくく、従って覚えにくい。漢字は覚えるまで待っていてくれるので覚えやすい。……それなら、小学校や中学校へ行って、なぜ漢字学習に苦しむのか。やっぱり、漢字は難しいのではないか。そういう疑問が起こるのも当然だと思います。

すべて、学習には、学習するのに適した時期があります。その時期に学べば容易に身に付きますが、その時期をはずすと、途端にひどく難しくなります。その「学習に適した時期」を〝臨界期〟と言います。

言葉の学習の臨界期は幼児期です。だれでも、四歳くらいまでの間に、母国語の大要を身に付けてしまいます。だから、四、五歳になって幼稚園に通うようになった幼児は、先生の話を理解することができ、また、自分の考えを他人に伝えることができるのです。

ところが、幼児期に、言葉を全く耳にすることなく育った場合、例えば、狼に育てられた少女カマラの場合など、言葉の学習はひどく困難なものでした。シング牧師夫妻の熱心な指導にもかかわらず、九年間に四十五語しか覚えられなかった、と報告されています。

臨界期内の幼児なら、三年間で二千語もの言葉が覚えられるというのに、臨界期を過ぎてから始めた学習では、九年間に四十五語しか覚えられなくなるのです。学習すべき時期（臨界期）を失うということは、何と恐しいことではありませんか。

漢字は〝目で見る言葉〟です。だから、漢字学習の臨界期は、言葉の学習の臨界期と同じく幼児期なのです。幼児期に学習すれば、二千字の漢字くらい、容易に覚えられるのですが、幼児期を過ぎますと、漢字を覚えるのがむずかしくなるのです。今まで、臨界期を過ぎてから漢字を学習させていたので、「漢字はむずかしい」と誤解されていたのです。

わが国の国語教育は間違っている

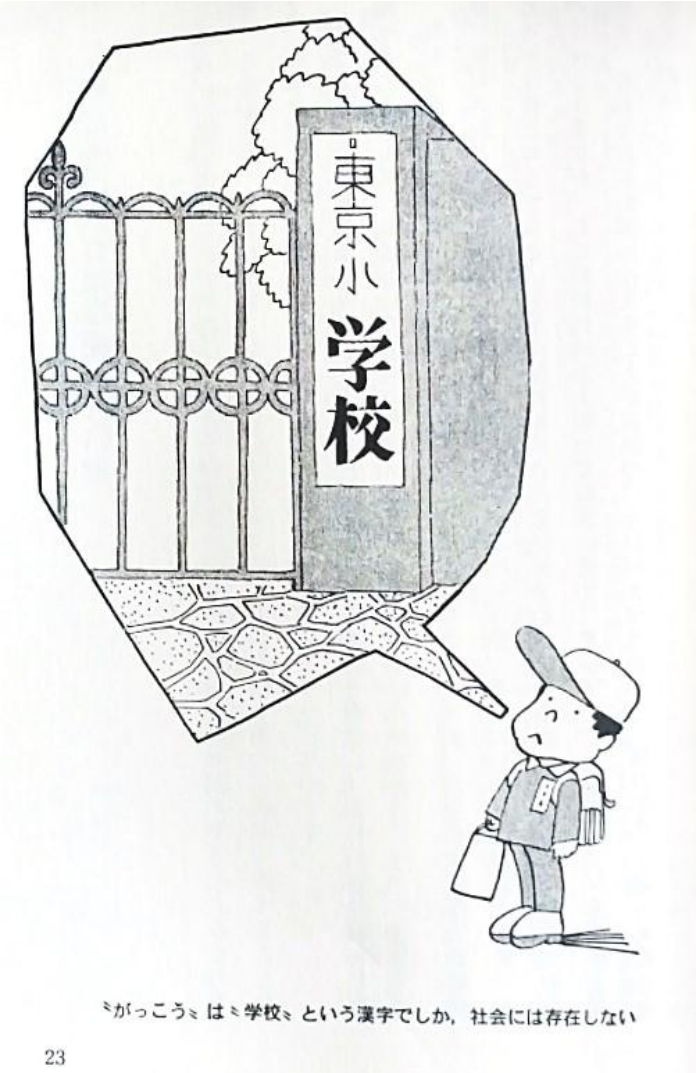
昭和二十六年九月、東京教育大学で開催された全日本国語教育協議会の小学校部会で、

「わが国では明治以来、〝学校〟という言葉を、社会には実在しない〝ガクカウ（戦前）〟〝がっこう（戦後）〟という表記で指導してきたが、初めから〝学校〟という漢字で教えた方がよいのではないか」

という意見を、私は発表しました。

しかし、このような意見は、教師の判断を越えたものであったためか、聞き流されただけで質問も意見も全く出ませんでした。その上、私は当時東京都内で指導主事という仕事についていたため、「文部省の基本的な方針を批判するなど、指導主事としてあるまじき行為である」というお叱りを上司から受けてしまいました。

「確かに、指導主事としては逸脱した行為であった」という思いと同時に、「この際自分の考えを実験によって確かめてみたい」という気持とで、小学校教員免許状を取り、昭和二十八年小学校教師となり、一年生を担任、初めから〝山〟、〝川〟、〝学校〟という



〝がっこう〟は〝学校〟という漢字でしか，社会には存在しない

23

漢字で教えてみました。この時の私の考えは、初めから漢字で教えるのは、「それが〝かな〟よりやさしいから」というのではなくて、「教育とは、社会で標準とする正しいものを教えるべきものであり、学習の難易によって左右されるべきものではない」という考えでした。

その根底には、次の考え方があります。

〝がっこう〟という表記が社会には実在しませんから、その表記を学習して身に付けても、教科書以外にはそれを活用し、学習したことを深める場がありません。せっかく学んだものが社会で用をなさないのは勿論、そのため真の読み書き能力が育たないのが問題です。〝学校〟だと、初めは難しくても、身の回りにそれが沢山存在していますから、自然と読む機会があって能力が育つはずです。……そういう考えがありました。

零歳児が最も頭を使っている

人間が物事を考えたり、判断し、意志を決定するのは、大脳の神経細胞の働きによるものです。この細胞は、生まれた時、百四十億個ほどあって、他の細胞と違って新陳代謝することなく、死ぬまで一個もふえません。それどころか死滅して減少する一方なのです。

生まれた直後の神経細胞は、日を追って枝のような神経繊維を伸ばし、これが他の細胞と連絡することにより、全体としての頭の働きが出来るようにしていくのです。

神経細胞は、コンピューターのトランジスターみたいなものですが、生まれたばかりの時には、他の細胞との連絡がなく、言わばまだ配線されない状態、部品だけの状態にあります。ところが生後三年もすると、主要な配線はほとんど完成され、一生かかって行うものの六、七〇パーセントまでが、この期間に出来上がってしまいます。そして、この配線は、一度出来上がると、それを別の配線に変えることが困難で、それがカマラの努力（狼の配線を人間の配線に変える）が実らなかった理由です。

乳児が五官を通じて大脳の神経細胞で受けとめる外界の刺激は大変なものです。すべて初体験であり、それをどのように処理するかは、一国の首相が国政を処理するよりもずっと困難なものがあるのではないかと思います。

目覚めている時の大脳の活動は、大人のそれの数倍、数十倍に当たるでしょう。だから、大脳の疲労も甚（はなはだ）しく、目覚めているかと思うと、すぐに眠ってしまうのだと思います。

乳幼児期の初体験の多いことから考えれば、乳幼児ほど大脳を使う者はないのではないかと私は思っています。最も大脳を使う者が最も睡眠を必要とするのは当然です。また、最も大脳を使うので、大脳の発達が最も発達し、神経細胞の配線も最も発達するのだ、と思います。

意外にも〝漢字〟は〝かな〟よりもやさしかった

さて実際に、一年生に初めから漢字で教えてみますと、たちまち漢字を覚えてしまい、文を読む場合にも、かな書きのものより漢字書きのものの方をすらすらと読むのです。漢字はむずかしいどころか、かなよりもずっとやさしいことが解りました。

当時、文部省の指導要領では、一年生の漢字学習の目標は〝漢字が三十字ほど読める〟というものでしたが、私は、学習漢字を三百字くらいにねらっていました。ところが、子供がおもしろいように覚えるものですから、とうとう三百字を越えてしまいました。その後の実験では、もっとふやして、結局五百字に及びましたが、それでも消化不良を起こす子供はなく、三百字の時よりも五百字の時の方が、すべての面で良いという結果さえ得られました。

一年生に漢字500字教えても消化不良は起こさない

クラスにはたいてい一人か二人、一年かかっても五十音さえ覚えられない子供がいるものです。そういう子供でも、漢字は二百字くらいは覚えます。そして、この覚えた漢字を頼りに、前後の読めない〝かな〟を推し量って読みます。かなばかりの文では全く読めようもありませんが、漢字の多い文は何とか判読できるのです。そんな読み方をしているうちに、かなをもいつしか覚えてしまいました。

知能の高い子供は、かなでも漢字と余り違わないくらいよく覚えます。しかし、知能の低い子供は、漢字はよく覚えますが、かなはなかなか覚えません。知能の低い子供は、抽象能力が低く、分析能力が低いからです。

記憶の原理は第一が〝関心〟、第二が反復です。とりわけ「心ここにあらざれば見れども見えず」という訳で、単なる音声を表わすだけのかなは、抽象能力の低い、知能の低い子供には関心が持てないので覚えられないのだ、と思います。

鳩は鳥よりもやさしく、鳥は九よりもやさしい

小学校教師としての十四年間に担任した子供たちの中で、最も知能の低かったのがＹ君でした。一年生を終わっても、かなが一文字も読めるようになれなかった子供です。漢字は百字くらい覚えましたが、〝一〟や〝二〟という漢字は読めませんでした。

ところが、一般にそれよりも難しいとされている雪や雲という字は、決して間違えませんでした。余り自信あり気に答えるものですから、「Ｙ君、雪はくもという字じゃあないのかい」と言って自信を覆そうと試みるのですが、決して答えを翻（ひるがえ）しませんでした。

「一や二のように、外見はどんなにやさしそうに見えても、内容の抽象的な文字は難しく、反対に、外見ではどんなに難しそうに見えても、具体的な生き生きとした内容を持った漢字はやさしいのだ」ということを、Ｙ君は私に教えてくれました。

鳩は鳩，蟻は蟻……幼児の目には生き生きと

幼児は、だから、鳩でも蟻でも容易に覚えます。その字が、生き生きと幼児の目に訴える実在を表わした字だからです。それに比べると、鳥や虫という言葉は、幼児には理解しにくい言葉です。鳥という鳥は実在しませんし、虫という虫は実在しないからです。

ところが、親でも教師でも、初めは鳥や虫という言葉を使って、鳩や蟻という言葉を使いません。

蟻も虫、蝶も虫、蝿も虫と教えます。これでは虫とはどんなものか解らなくなってしまいます。だから、子供が塵を拾って「虫、虫」と言うのだと思います。

子供には、鳩は鳩、鶴は鶴、蟻は蟻、蝶は蝶と言って教えてやるべきです。しかも、それを漢字で教えてやりますと、子供は、すぐに、鳩と鶴は同じ仲間、蟻と蝶が仲間であることを理解し、鳥がとり、虫がむしで、鳥や虫はそれぞれの仲間を総括する上位概念であることを理解します。このように、具体物の理解を通して、初めて抽象的な概念を理解する能力が育っていくのです。

漢字を学習すると頭が良くなるわけ

このごろ、漢字を学習させている幼稚園が多くなりました。その理由はいくつもありま

すが、その一つは、「漢字学習をさせると、幼児の頭が良くなる」という事実が、次第に明らかになってきたからです。

「頭は使えば使うほど良くなる」と言われていますから、どんな学習だって、頭を良くするわけですが、とりわけ漢字学習が良いというわけは何でしょうか。

鳩と鶴が同じ仲間、蟻と蝶が同じ仲間であることは、漢字で学習した子供はだれでもひとりでに理解し、そのため、物をまとめたり、分類したりする態度や習慣がひとりでに作られていきます。だから、まだ習わない漢字を見ても、「鶯は鳥の仲間だな」「蝉は虫の名前だな」という風に推理します。

〝はと〟や〝つる〟という表記で学習させていたのでは、こういう態度や習慣は、いくら育ててやろうと思ってもなかなか育てられるものではありません。それどころか、〝はと〟と〝つる〟が同じ仲間であることを理解させることが困難です。〝はと〟も〝つる〟も〝とり〟と言って同じ仲間だよ」と教えてみたところで、幼児にはなかなか理解できないでしょう。

鳩、鶴、鳥という漢字を知っている子供なら、「鳩も鶴も鳥と言って、同じ仲間だよ」と教えてやれば、いっぺんに理解するでしょう。しかし、そんな事は、教えてやらなくても、そういう漢字に触れ、読んでいるうちに、ひとりでに考えつき、まだ習わない漢字を見ても、それを自分の今までの知識を総動員して推理し、判断するようになるのです。

漢字学習をしている幼児は、推理力、想像力、判断力などにおいて、普通の幼児に比べて断然優れています。だから、知能指数なども驚くほど高いのですが、これは当然のことと私は思っています。

漢字によって生ずる誤解は、かえって正解を得やすくする

鯨は魚類ではなく哺乳類である。漢字で学習することによって誤解しやすいのではないか。……と考える方もいらっしゃるかと思います。しかし、そういうことは少しも心配すべきことではありません。

鯨は海に棲み、魚の仲間だと長い間だれからも思われて来ました。だから鯨という字が作られたのです。そこで、子供が「鯨は魚の仲間だ」と言ったら、「よく気が付いたね。えらい」とまず賞めてやるべきものです。

「でも、今では魚の仲間ではない事が解ったんだ。魚は卵を沢山生んで、その卵から出て来た赤ちゃん魚が、赤ちゃんたちだけの力で大きくなる。ところが鯨は、牛や馬と同じように、赤ちゃんを生んで、お母さん鯨がお乳を飲ませて育ててやるんだ。だから、今

鯨は魚でないことも漢字を覚えれば教えられる

では、牛や馬と同じ仲間ということになったんだよ」と教えてやれば、鯨という字がきっかけで、正しい認識発展の歴史を理解することができます。

「大根は漢字で〝大根〟と書くために、ほんとは茎なのに〝根〟だと誤解されている。これは漢字による弊害だ」とだれかが言ったのを、私はよく覚えています。しかし、辞典には、たいてい「野菜の一種。白くて大きな根と葉は食用にされる」とあって、茎とはありません。植物学的には茎でも、一般には根だと考えられており、だから〝大根〟と名付けられた訳です。また、一般には〝根〟の方が通用しているので、〝茎〟と言ったら通じません。

しかし、どうしても〝茎〟であることを教えたいなら、鯨の場合と同じように説明すれば、〝茎〟の印象がかえって強くなり、〝大根〟という表記であるがために、かえって忘れられないものになるでしょう。

私も、一度〝茎〟だということを耳にしただけで、そのことをよく覚えて いたのも、そのためだと思います。これが〝大根〟という字でなかったら、とても覚えてはいなかったでしょう。

人間も動物の仲間なんだね

一般に子供たちは、〝動物〟という言葉を、〝獣〟もしくは〝哺乳類〟の内容で理解しています。テレビで理科の先生までが「鯨は魚ですか。動物ですか」と質問していました。動物は魚類、鳥類、哺乳類、昆虫などの上位概念なのに、魚類の対立概念として使っているのは、動物を明らかに哺乳類の意味に使っている証拠です。このように、先生でさえ間違えるくらいですから、小学生ではなかなか理解できないのが普通です。

ところが、一年生に〝動物園〟と書いて指導しますと、「先生、動物って、動く物と読めるね」と言います。「そう。生き物は、草や木のように一つ所に立っていて動けない物と、犬や猫のように動き回れる物と、大きく二つに分けることができる。動き回れる物を、動く物と書いて〝動物〟と言うことにしたのだ」と教えてやりますと、「へーえ、じゃあ蟻さんも動物なの」「金魚も動物なんだね」「人間だって動物の仲間なんだね」子供たちは驚いたように言いました。

これは、〝動物〟という漢字だから、ここまで一年生が考えるのです。〝どうぶつ〟というかな書きでは、絶対にここまで思考は発展しません。

「遠足の集合時間は八時三十分。時間を間違えないようにね」私がそう言いましたら、「先生、八時三十分は時間ではなくて時刻ですよ」と一年生に訂正されました。

時刻と時間について、学校では区別できるように教える教材があり、必ず教えることに

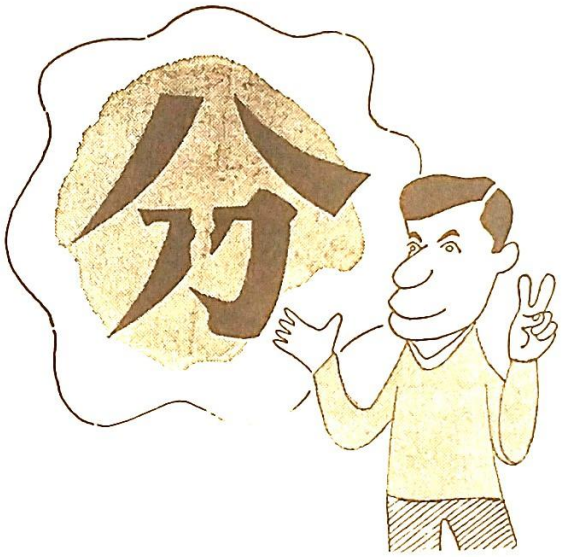
動物という字を知っていれば，蟻も金魚も動物ということが……

なっています。しかし、それは〝じかん〟と〝じこく〟という表記なので解りにくく、また、教える方もその時だけで、あとは無関心です。

それで、教える先生が混用するものですから、一度は正しく覚えた子供も、すぐ混用し、誤用するようになってしまいます。しかし、漢字で学習した子供は、理解が深いので、自信をもって先生の誤用を訂正できるのです。

四分音符二つで、どうして二分音符と同じなんだろう

音楽用語に〝四ぶおんぷ〟〝二ぶおんぷ〟という言葉があります。符という字が教育漢字でないものですから、中学生にならないと、〝四分音符〟〝二分音符〟という表記になりません。



二分は一つのものを二つに分けること……

だから、「算数では四ぶと四ぶとでは八ぶなのに、音楽では四ぶと四ぶとでは二ぶになるんだな。ややこしいな」と思い、また「音楽でも、二ぶと二ぶとで四ぶ、四ぶと四ぶとで八ぶ、というようにすればよいのに。なぜ逆にするんだろう」と疑問に限っている子供がいます。

しかし、そこまで考える子

供は正しく理解できる子供ですが、そこまで考えない子供は二分音符と四分音符とを間違えたり、二分音符二つで四分音符になると思い違いをしたりします。とにかく、この用語を正しく理解することに子供たちは苦労しています。

ところが、初めから〝四分音符〟〝二分音符〟という漢字で教えますと、だれでもぴしゃっと解ってくれます。〝分〟という字は、刀で物を切り分けたことを表わした字で、〝分ける〟という意味の字です。一つの物を二つに分けるのが〝二分〟で、四つに分けるのが、〝四分〟です。だから、四つに分けたもの（四分）を二つ集めると、二つに分けたもの（二分）と同じになります。つまり、四分音符二つは二分音符だ、ということがすっきりと理解できます。だから、〝二ぶおんぷ〟ではなかなか理解させることが困難で、誤解が多かったのに、〝二分音符〟という漢字で教えますと、簡単に理解してくれて、誤りもありませんでした。

このような例を挙げたらきりがありませんので、これくらいにしておきましょう。とにかく〝言葉は漢字で〟理解させたら、早く、正しく、深く理解できることを知って下さい。

英語も、漢字で学習したら、効果が高まった

言葉を漢字で学習する効果は、私たち日本人だけに限りません。数年前、アメリカで、アメリカの子供が、その母国語である英語を学習する場合にも、今までのようにローマ字の綴りで学習するより、漢字で学習した方が効果が高い、ということを実証したアメリカ人がいます。アメリカの子供たちは、mountain という文字で〔màuntin〕という発音の言葉を学習しています。ところが、それを山という漢字で学習させた人がいたのです。つまり、山という漢字を〔màuntin〕と読むように教えたのです。

すると、幼児は、mountain という綴りで学習した場合より、〝山〟という漢字で学習した場合の方が、その意味や読みを早く理解し、覚えたというのです。

私はこの話を初めて耳にした時、「それはそうだろう。そのはずだ」と思いました。

「英語を漢字で学習する」と言えば奇妙に聞こえるかも知れませんが、私たちだって「日本語を漢字で学習している」のであって、少しも奇妙なことではありません。だから、日本語を漢字で学習することが有効なら、英語を漢字で学習することが有効でないわけがありません。その意味では、「漢字を世界の共通文字にする」ことも考えられないことではありません。ドイツ人はドイツ語を漢字で学習し、フランス人はフランス語を漢字で学習する、というようにするのです。

それは、「日本語を漢字で学習する」今の用法を作り出した日本人の苦労に比べたら、実に容易にできることなのです。なぜなら、中国語の持つ性格は、日本語の性格よりも、

青い目の子供も漢字で学習する

欧米語の性格にずっとよく似ていて、私たちが戻ったりとびこしたりして読む中国の文章も、欧米人は頭から順番に読んで理解することができるからです。

アメリカの幼児たちも〝麒麟（きりん）〟や〝蜘蛛（くも）〟を学習

五十一年の夏、アメリカを周遊した折、私は、フィラデルフィアの郊外にある〝人間能力開発研究所〟を訪れました。〝ドーマン博士の幼児開発法〟や〝親こそ最良の医師〟などの著書によって、わが国にもその名を知られたグレン・ドーマン博士の経営する研究所です。

研究所の中をあちらこちら案内されているうちに、紙障子で囲まれた和室に案内されました。そこは、アメリカの幼児（大体は三歳児）たちが漢字を学習する部屋でした。室内には、わが国の中学生だって読めない〝麒麟（きりん）〟や〝蜘蛛（くも）〟などを含む漢字カードが、沢山備え付けられていました。

夏休み中でしたから、ドーマン博士はもとより、幼児教育に当たる先生も幼児たちもいませんでしたので、どのような目的で、どのような学習をしているのか、知る由もありませんでしたが、その漢字学習は〝漢字を覚えるための学習〟ではなくて、〝幼児の頭の働きを良くするための漢字学習〟に違いない、と私は思いました。

なぜならばアメリカの幼児たちが、漢字を覚え、漢字が読めるようになったからと言って、実生活の上で何の役にも立たないからです。幼児たちの生活の場には、漢字は一つだって見られません。漢字はアメリカの幼児たちには全く実用的価値がないのです。

それよりも、日本の幼児が鳩や鶴から鳥を自然に発見し、鯉や鰌（どじょう）から魚を理解するように、アメリカの幼児も〝英語を漢字で学習する〟ことで、分析したり総合したりする

態度や習慣を養い、物事を帰納的に考えたり、演繹的に思考する能力を育てることをねらっているのだと思います。

〝はと〟や〝つる〟という表記では〝とり〟が出て来ないように、pigeon, crane という綴りで学習したのでは、それが bird であるという思考が育たないからです。

アメリカの幼児たちが漢字を学習する意味

アメリカの幼児たちが、こうして英語を漢字で学習することによって、幼児たちの知能が著しく向上するだろうということは、疑いありません。私はそう確信しています。しかし、それが科学的な実態調査によって裏づけられ、世間の人々に確認されるまでには、まだまだかなりの年月を必要とするでしょう。

それはともあれ、アメリカの幼児たちでも、三歳で、麒麟（きりん）や蜘蛛（くも）などという漢字でも十分に覚えることができる、ということだけは確かな事実です。この事実は、わが国の幼児漢字教育に大きな刺戟を与えてくれるに違いありません。そう思って、私は嬉しくてたまらなくなりました。

というのは、私が幼児の漢字教育を主張し始めて、今年で十年になります。その十年間に、私の主張に共鳴して漢字教育を実践してくれた幼稚園、保育園は、全国でわずかに二、三百。園児数にして五、六万人に過ぎません。大方は、「幼児に漢字を読ませるとは乱暴だ。幼児がかわいそうだ」と言って反対し、私に対して激しい敵意さえ示します。

しかし、そういう反対は、私の主張を冷静に受けとめず、ただ感情的に排斥するものであって、もう少し理性的になって私の主張に耳を傾けてほしいと思います。素直に耳を傾けて下さるならば、幼児の漢字教育は、少しも乱暴でもかわいそうなことでもないこと、

いや、そういう教育を受けないで幼児期を過ごす幼児の方がかわいそうだ、ということが解ってくれるはずです。

中学生で学習についていけない者が半分以上ある、と言われています。その原因の大半は、漢字力がないため、教科書が読めない、理解できない、ということにあるようです。漢字学習の臨界期をはずして、学校で漢字学習に苦しみ、その上漢字力もつかないでは、その方がかわいそうではありませんか。

かなは一字も覚えられなかった脳障害児が、漢字はどんどん

昭和四十九年七月、私は、四歳半になる脳障害児について相談を受けました。その子供は、一歳半の時、ダンプカーにはねられて、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負い、以来、心身障害児となったものです。

その方面のあらゆる施設や病院を回ったが、どこでも回復不可能という烙印を捺され、家庭で暗中模索の指導をしていたとのこと。また、前の年から、かな書きによる本人の名前が読めるようにと、指導して一年になるが、まだ一文字も読めるようにならないこと。……などの話を聞きました。

私は、「毎日、漢字を教えること」の意義と方法について、両親に説明してやりました。その方法を一口に言いますと、毎日、一枚の漢字カードを十五回、一回におよそ十秒間かけて、カードを見せながら読んでやる、というものです。一日の学習時間は、わずか延べ二分半に過ぎません。

さて、それから一週間後、その父親から送られて来た手紙には、「毎日一宇ずつ覚えて、今はどの字も間違わずに読めるようになった」こと。「一年かかってもかなが一文字も覚

えられなかった時は悲嘆のどん底にあったが、今は回復の希望が持てるようになった」ことなどが、こまごまと書かれていました。

一年半後の手紙には、「今までに覚えた漢字が三〇〇字。その上、かなも濁音、半濁音を含めて全部覚えた」とありました。今、小学校で、六年生が一年間に学習する漢字は一九〇字です。しかも、習得できる漢字数は、学級平均せいぜい一三〇字というところです。

つまり、正常の脳を持った子供でも、五、六年生の二年間に三百字の漢字を覚えることは大変なことなのです。それに比べて、四歳半の脳障害児が一年半の間に、漢字とかなを合わせて三〇〇字も覚えたということは、何とすばらしいことではありませんか。

一日一字ずつでも一年半なら 300 字以上も……

脳障害児が、漢字を覚えて、こんなに変わった

この脳障害児に会ったのは、ただ二回だけです。最初は、四十九年七月、初めてこの子の家を訪れ、両親に指導法を教えた時、次は、それからおよそ八か月ほどたった日のことです。

最初の印象では、暗い表情というよりもむしろ無表情で無口な子でした。ところが、次に会った時には、見違えるほど明るく、豊かな表情で、目も生き生きとしており、母親にしきりに話しかけ、時おりにこっとする笑顔が印象的でした。

その日の私の日記には、「〇〇で〇〇氏親子に会う。〇子ちゃんは驚くほど良くなっていてもう少しの努力で常人となり得ることを確信す」と誌されていて、その時の様子は今もはっきりと思い浮かべることができます。

この間の父親とのやり取りの記録（手紙）は、すでに月刊〝幼児開発〟（財団法人・幼児開発協会発行）に、〝ある父親の手紙〟――脳障害児の記録――として発表しましたので、詳しいことは省きます。ただここで、皆さんに知って頂きたいことは、この子の情緒が、漢字を覚えていく過程で、次第に安定していった、ということです。

例えば、「それまでは、時々かんしゃくを起こしていたものだが、それが我慢できるようになった」こと。「病気で診察を受ける時、二人がかりでないと受けられなかったのに、聞き分けができて、一人で受けられるようになった」こと。……などがあります。

指導一年半後の父親の手紙には、「〝赤頭巾ちゃん〟の絵本を一日に二、三回続けて読まされて閉口している」こと。「赤頭巾ちゃんのお父さんはどうして出て来ないの」「お婆さんが前のページでは眼鏡を掛けているのに、ここではなぜ掛けていないの」などしきりに質問するようになった、など著しい変化が見られる、と書かれています。

重度の精薄児は、かなよりも漢字が大好き

神戸の垂水に〝樅の木学園〟という、重度の精薄児のための学園があります。児童と教師とが一緒にそこで起居をしている、いわゆる二十四時間教育を行っている学園です。

私は、八年ほど、特殊学級の児童、生徒たちと同じ建物の中で暮らしたことがあります。それで、樅の木学園の園長から指導を頼まれた時、気軽にそれを引き受けました。

しかし、教室に案内され、子供たちの顔を見た時、その表情の異常さに、正直なところぎょっとしました。予定していた話はこれではとても通じないなと思うと、頭が混乱状態に陥り、私はしばらく茫然としてしまいました。

ここには、知能指数の測定不能という子供も何人かいて、私は初めて、精薄児にもいろいろな段階のあることを、はっきりと知らされました。

私は、心を取り直し、園で飼っている羊のことを話題に、子供たちに話しかけました。子供たちが私の話を受け入れてくれているのかどうか、その反応が解らないということは全く話しにくいものです。私はこの時、心の落ち着きを完全に失っていました。

ひどく長く感じられた時間も、終わりに近づいて、黒板に書いた〝羊〟など、いくつかの漢字を試みに質問してみました。すると「ひつじ」と読むではありませんか。「ようし、もう一度やってみよう」と思いました。

一か月ほどたって、今度は猿蟹合戦の話をしました。猿、蟹、蜂、栗、臼、五枚の漢字カードを作り、これを提示しながら話を進めていきました。話が終わり、これらのカードを読ませてみますと、どのカードもだれかしら読んでくれます。でたらめに読む子、誤って読む子は一人もいませんでした。

かなは読めなくても、猿や蟹は容易に覚えられて読め、読める漢字が大好きだ、

ということを私はここでも教えられました。

精薄児は幼児とよく似て、漢字の多い文だと喜んで読む

樅の木学園でもそうですが、どこの特殊学校でも、読み書きは、かなを主体にして、漢字はごく僅かしか教えないようにしています。だから、六年生の教科書でも、一年生の教科書ではないかと思うくらい、漢字が少なくてほとんどかな書きです。

ところが、精薄児は、年齢が大きくても、精神は幼児のようなものですから、抽象的なかなには興味が持てなくて、なかなか覚えないのです。反対に、具体的な意味内容を持つ漢字は、喜んで覚えるばかりでなく、覚えると読みやすいので、漢字の多い文章だと喜んで読むものです。……私は、このことを樅の木学園の子供たちから教えられました。

重度の精薄児でも漢字なら理解する

花多きは実少なし

口が動けば手が休む

馬の耳に春の風

鳩に三枝の礼あり

雨だれ石を穿(うが)つ

雪の枝叩くも愛の一つなり

高い木は風に折られる

このようなカルタを大阪の幼文社に作ってもらい、これを〝樅の木〟の子供たちに使って遊んでもらいました。ところが熱中して、一時間ぶっ続けにやっても飽きる様子がないのです。これには私も全く驚かされました。

一般に、知能の低い子供は飽きやすく、一つの事を長く続けて学習させることができな

漢字を使ってお話を結ぶ幼児に教育する石井先生

い、と言われています。しかし、漢字を覚えて漢字を読む力がつけば、その力を使って競争するというような適当に知的なゲーム風学習なら、長時間熱中して飽きないものであることを、これまた〝樅の木〟の子供たちから教えられました。

ところが、幼稚園で漢字教育を排斥する所が多いように、特殊学校では漢字教育などとても無理だと、頭からそう決め込んでいるのです。

言葉の言えない脳障害児が、漢字を覚えたら

東京都八王子市めじろ台にある私の研究所では、就学前の幼児に対して、主として漢字による教育指導を行い、その知能を高める研究をしています。正常児を主体にしていますが、脳障害児や精薄児も何人か指導して来ました。

指導は一週間に二日、一日に二時間行います。母親にも参加してもらい、指導法を体得してもらって、できる限り家でも母親に指導してもらうようにしています。

こういう子供たちの中に、脳障害による精薄児で、言葉の言えない幼児が二人いました。発声器官には異常がなく、言葉を覚える能力が劣っているため、言葉が言えない子供たちでした。知能が低いばかりでなく、体力も劣っており、運動能力も大層低いものですから、そういう面の指導も行わなければなりません。従って、漢字学習は、二時間のうち、たかだか十分から二十分くらいのものです。

漢字学習と言っても、子供の好む内容の漢字カード（例えば、苺（いちご）、栗、積木、絵本等）を見せて、その実物を対照させながら、読んで聞かせるだけのことです。例えば、苺というカードを、実物の苺と共に子供に見せて、「これは苺ね。こちらは〝いちご〟という字よ」というように、これを二、三回くり返して言うのです。

この学習を続けていますと、まず、苺と〝苺〟という字との結び付きが出来、カードを見て苺を指さすようになります。「よくできたね。この字は〝いちご〟だったね」と、〝いちご〟に特に力を入れて大きな声ではっきりと言うようにして、カードの字と物とが正しく合ったことを讃めてやります。

これを続けていますと、今度は〝いちご〟という言葉も記憶でき、それと〝苺〟という字とが結びつき、カードを見て苺を指さしながら〝いちご〟と言えるようになります。

つまり、言葉が言えるようになるのです。

漢字を覚えた脳障害児が、言葉を覚えたのはなぜ

子供が初めて「いちご」と漢字を読んだ時、私たちは思わず「えらい。いちごって読めたね」と言って、子供に抱きつくようにして讃めましたが、子供もいかにも嬉しそうににっこりしました。それから後は、カードを見せると、毎回喜んで読むようになりました。

言葉というものは、発せられるや否や消えてしまうので、受け取りにくいものです。その受け取りにくい言葉と物とを結びつけなければならないのですから、言葉を覚えるということは大層むずかしいわけです。

ところが、漢字は消えませんから、字と物とを結びつけることが出来ないということは考えられません。字も物も、どちらも視覚的なものですから、結びつきやすいはずです。

このようなわけで、大脳の中に、物と、物を呼び出す信号である漢字との連絡が出来、その連絡された神経をたびたび使っていますと、その神経が次第に発達し、頭の働きが敏感になっていきます。

こうして働きの良くなった大脳が、受け取りにくい言葉を受け取ることが出来るように

なり、次に、その言葉と物との結び付きが出来、言葉が言えるようになったのだ、と私は考えます。

普通児が、何の苦もなく覚えていっている言葉は、重い脳障害児には越えることの出来ない高い障壁なのです。その間に、中間的な踏み台を置いて、それに登れば、それからは乗り越えることが出来る。その中間的な踏み台の役目を果たしたのが〝漢字〟だったのです。

二人の脳障害児も、２５ページの〇子ちゃんも、漢字を覚えることにより頭の働きを良くし、言葉ばかりでなく、感情や情緒の面、体力や運動能力の面でも、著しい進歩を遂げました。人間のすることはすべて大脳に関係しますが、漢字の学習がこの子たちの大脳を発達させたことは実に大きいものがあったと思います。

イチゴも苺も言葉のように消えないので……

東大生が最も多く読んでいる雑誌は少年向け漫画週刊誌

数年前、東大新聞が、東大生の愛読する書籍や雑誌について調査、発表したことがあります。驚いたことには、最も多く読まれている雑誌が、少年マガジン、少年サンデーという、小中学生対象の漫画週刊誌だったことです。

今の大学生は、ヘルメットをかぶって棒を振り回すか、密室に閉じこもって爆弾作りに夢中になる者と、漫画を読み、マージャンを楽しむ者との二種類がある、と言われています。それだったら、漫画を読む大学生が最高ということになりますが、これはどう考えてもおかしいことではありませんか。

「大学生は漫画を読むべきではない」などと言うのではありません。度が過ぎているのが問題だと思うのです。通学の電車の中で、前に老人が立っているのにも気が付かないほど漫画に熱中するのは、どう考えても大学生の常態であってはならないと思うのです。

「学んで思わざれば暗し」とは至言だと思いますが、通学の途上でくらい、漫画を読むのをやめて、大学生らしい思索にでも耽ってほしいと、漫画に夢中になっている大学生を見るたびにいつも私は思います。しかしながら、何も「学んで」いないから、思索する種がないのかも知れません。

今の大学は、エリートの学問する場所ではなくて、大衆が青春を楽しむ場所に変わっているのだから仕方がない、と言う人もいます。確かに、そう言えば言えないこともないようです。しかし、私には、そのように割り切って、座視することはできません。

元来、学問はおもしろいものなのです。真理の探究ほど楽しいものはないと思います。同じ読書でも、奥行の深い学術的な専門書の方が、読書力さえあるならば、味わいが深く、読めば読むほど楽しさが増すものと思います。

「学んで時にこれを習う。また悦ばしからずや」の言葉通りだと思います。

大学生の漫画好きの原因は、漢学力が弱いから

書物は正に宝の山だと思います。とりわけ、古典は宝の山です。どんなに多くの人が、いくら掘り取ったところで、決して尽きることのない宝の山です。この宝を掘ろうともしないのはそのすばらしさを知らないからに違いありません。

大学生がほんものの書物を読まないのは、そういう読書の楽しさを知らないからに違いないと思います。そして、その読書の楽しさを知らない理由は、読む力が弱いからだと思います。

足の弱い者は、せっかく宝の山に足を踏み入れても、すぐに坐り込んでしまって宝を手にすることができないように、読む力の弱い者は、書物を読み通すことが出来ず、従って、その神髄を理解することができるはずがありません。

読む力とは、何か。それは勿論漢字を読む力のことです。漢字かな混り文とは言うものの、主要な概念を表わしているのは漢字ですから、漢字が読めないことには、書物が読めないのは当然です。

幼稚園で漢字教育をしている所では、必ず次のような話を聞きます。それは母親の声です。「こちらでお世話になっております子供の上に〇年生の兄（姉）がおります。この子に世界名作選を読ませたいと思い、買ってやったのですが、少しも読もうとしません。読むのは漫画の本ばかり。ところが、下の方は漢字教育のお陰で、漫画など見向きもしないで、兄の世界名作選の方を読むんです……」

子供というものは、よく出来ることはきりもなくやりたがりますが、うまく出来ないこ

とは決して進んでやろうとはしません。漢字がよく読める子が本を読みたがり、漢字の読めない子が本を読みながらないのは、当然のことです。今の大学生が学術書を読まないで、漫画を喜んで読むのは、漢字力が弱いためだと考えられます。